

Title	「雪渡り」の授業を考える
Author(s)	高橋, 幸紀
Citation	国語論集, 12: 134-137
Issue Date	2015-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7719">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7719</a>
Rights	

## 「雪渡り」の授業を考える

高橋 幸紀

### 一、はじめに

本論では、ポストコロナ論の視点から宮澤賢治の教材「雪渡り」を考えていこうとするものである。ポストコロナ論の論文としてはポストコロナ論とポストコロナ論の視点から見たテキスト分析がある。確かにポストコロナ論だけではその理論の先の具体的なものがはっきりしない。ポストコロナ論としては国内では小森陽一、安藤陽子、西成彦らの名が上がるが、彼らはポストコロナ論だけでなく、その視点から見た宮澤賢治のテキスト分析を行い、賢治テキストの新たな一面を引き出すことに成功している。ポストコロナ論の視点で賢治テキスト「雪渡り」を分析するとどのような姿が見えるのか。本論ではそれを考察していこうと思う。また、この理論を「雪渡り」の授業の中に取り入れるとどのような化学反応を引き起こし、どのような授業が可能になるのかも考えていきたい。

### 二、異世界へ移動できる〈特別な日〉とは

「雪渡り」は人間と狐の子供の交流を描いたテキストであり、小学校の教材としても使用されている。

「雪渡り」は〈ファンタジー〉の要素が冴え渡る。特に人間界から狐の世界という異世界への移動の描写がすばらしい。「雪の凍った月夜の晩」、「雪がすつかり凍って大理石よりも堅くなり、空も冷たい滑らかな青い石の板で出来てゐるらしいのです」、「木なんかみんなザラメを掛けたやうに霜でびかびかしてゐます」、「いつもは歩けない黍の畑の中でも、すすきで一杯だった野原の上でも、すきな方へどこ迄でも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢山の小さな小さな鏡のやうにキラキラキラ光るのです」、「キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました」、「青白い大きな十五夜のお月様がしづかに氷の山から上りました」、「雪はカチカチ青く光り、そして今日も寒氷石のやうに堅く凍りました」、「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠のお皿です。お星さまは野原の露がキラキラ固まったやうです」等の表現が文中にちりばめられ、美しく幻想的な世界が描かれる。この叙述で描かれる世界を想像するだけでも十分教育的価値があると思えるほどである。この異世界への移動の場面は「ひかりの素足」、「銀河鉄道の夜」、「注文の多い料理店」等の他の賢治テキストにも見られる。賢治が特に力を入れた箇所であり、賢治の想像力の結晶ともいえる場面である。賢治は作品に何度も手を入れる作家として有名

だが、「茨海小学校」というテキストでは、現存する原稿から異世界への移動の場面が書き足し、書き直しが最も多かった箇所であるということが確認されている。

「雪渡り」に話を戻す。めつたにない（特別な日）。「雪が柔らかくなる」といけませんからもうお帰らなさい」という子狐の紺三郎の言葉があるように、雪の表面が固く凍るわずかな時間のみ異世界への移動は許されるのである。その（特別な日）に四郎とかん子は狐の世界へと向かう。この「雪渡り」がそのままタイトルとなっていることからその重要性を感じる。これは異世界への移動が（特別）だというだけでなく、この交歓自体が（特別）なものなのだ、というようには考えることはできないだろうか。このように考えると「雪渡り」の世界、「イーハトヴ」の世界が少し見えてくる。

### 三、「雪渡り」の世界

「雪渡り」というテキストでは他の多くの賢治テキストと同様、普通に動物と人間が共通の言語を用い、言葉を交わしている。当たり前のようにさらっと書かれており、また賢治テキストでは当然のことでもあるので読者はあまり気に留めない。しかし、この共通の言語の使用がなければこのテキストは成立しないことは確かだ。

人間と狐が同じ言語を話している「雪渡り」の世界「イーハトヴ」。同じ言語を使用しているということはそれだけ両者の関係が密であり、互いに理解し合う世界が実現しているのだろうと考えるのが普通だろうが、決してそうではなさそうである。

この「雪渡り」で描かれている世界とはどんな世界なのだろうか。まず、狐と人間の関係を考えてみよう。そこに存在しているのは「人間上位、狐下位」の認識ではないか。人間におい

ても狐においてもその認識は確かにありそうである。（例外）として描かれる子狐と人間の子どもにおいてもその認識はあり、物語はその認識を前提として進められる。紺三郎の「あなた方のやうな立派なお方が兎の茶色の団子なんか召し上がるもんですか。」という会話にもそれが表れている。また、「行つてもいいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。」という四郎とかん子の兄の言葉も同様である。「大人の」と限定した表現を使っている点に関しては後で触れようと思う。

賢治テキスト「どんぐりと山猫」では、一郎の最後の言葉が原因で山猫からの手紙が来なくなる。西成彦は、『新編 森のゲリラ宮澤賢治』の中で、一郎の言葉の中には一郎の自分の、あるいは人間の優位性というものが感じられ、そのことが手紙の来なくなった要因であると分析している。この「雪渡り」では、狐の子どもは人間に狐が誤解されている、自分たちが正当に評価されていないと感じている。狐の子どもは、「私たちは全体いままでも人をだますなんてあんまりむじつの罪をさせられてゐたのです」、「偽ですとも。けれど最もひどい偽です。だまされたといふ人は大抵お酒に酔つたり、臆病でくるくるしたりした人です」と訴え、人間の子どもの四郎とかん子を「大切なお客さま」として扱う。彼らは自分たちと同じ子どもなら人間であつても自分たちの主張を理解してもらえないのではないかと期待しているのだ。逆に大人の人間には不可能だという認識、あきらめが彼らにはある。よって、「雪渡り」によつて狐の世界に移動できる者は限定されることになり、「学校生徒の父兄にあらずして十二才以上の来賓は入場をお断はり」とされる。四郎とかん子の上の三人の兄は幻燈会に参加できず、「それでは残念ですが兄さんたちはお断はりです。あなた方だけいいらしい。」と言われてしまうのである。

この「雪渡り」で人間(の子ども)の(子)狐とのつながり、信頼をはかる道具として、「食」、つまり紺三郎の作った「(黍)団子」が使用されている。子狐の紺三郎は(黍)団子を四郎とかん子に二度勧める。両者が出会った時と幻燈会の時である。最初の出会いの時、紺三郎は「とにかくお団子をあげりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑で作って播いて草を刈って叩いて粉にして練ってむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さしあげませう。」と四郎とかん子に勧めるのだが、ちょうどお餅を食べてきておなか一杯だからという理由で四郎が断る。幻燈会の際に勧められた二度目の時は、四郎は「すっかり弱ってしまっ。それは子狐たちが用意した幻燈で、たつた今太右衛門と清作とも悪いものを知らないで喰べたのを見てゐる」からである。まわりの狐の子どもたちは「こつちを向いて「食ふだらうか。ね。食ふだらうか。」なんてひそひそ話し合つて」いる。四郎は意を決して、「ね、喰べやう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺ますなんて思わないよ」とかん子に言い、二人は黍団子をみんな喰べた。その黍団子は頬つべたも落ちそうなほどおいしかったのである。それを見ていた狐の学校生徒は「あんまり嬉んでみんな踊りあがつて」しまう。四郎もかん子も「あんまり嬉しくて涙がこぼれ」た。幻燈会の最後の紺三郎の「みなさん。今晩の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留めなければならぬことがあります。それは狐のこしらえたものを賢いすこしも酔はない人間のお子さん喰べて下さったという事です。そこでみなさんはこれからも、大人になつてもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄の悪い評判をすっかり無くしてしまふだらうと思ひます。」という言葉から、人間が狐のこしらえたものを喰べるといふことがいかに重要なことかをうかがい知ることができる。団子を勧め

るといふ行為は狐にとつて好意の表象であり、それを喰べるといふことはその好意を受け入れることの表象なのだ。幻燈の内容は四郎とかん子の真意を測るための布石だったのか。別れ際の「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」という紺三郎の言葉はいささか大げさすぎる感もあるが、狐たちにとつて四郎とかん子が団子を喰べたといふことは、まさに「恩」なのである。いかに狐と人間の両者が警戒しあつてゐるか、それを改善することを子どもたちの世代が切望しているかをうかがい知ることができる。この日の出来事は紺三郎ら子狐たちにとつては記念すべき(出発点)なのかもしれない。

少なくとも子狐たちは人間と狐の共生に不安を感じてゐる。これが「イーハトヴ」の一面であり、「雪渡り」というテクストで描かれてゐる「イーハトヴ」の世界なのである。共通の言語を持つといふことが人間と狐、両者の理解や幸福に直結してはゐない。

### 三、「雪渡り」ラストシーンの表象

次に「雪渡り」のラストシーンの表象について考えたい。「二人は森を出て野原を行きました。その青白い雪の野原のまんなかで三人の黒い影が向こうから来るのを見ました」という四郎とかん子が異界である狐の世界から人間界に戻る最後の場面だが、迎えに来た兄たちが「黒い影」で表現されている。この「黒い影」といふ表現は四郎とかん子の兄という固有の者の表象ではなく、「大人の人間」といふ狐と決して交わることのないものの表象として表現されており、この「雪渡り」の世界を、あるいは「イーハトヴ」の世界を象徴しているラストシーンといえる。

「黒い影」は四郎とかん子がまだ狐の世界を出ていない所、

いわば境界線上で見たものであり、完全に人間界に入ってしまった。「黒い影」は兄たちといった実体を持つことになる。この「黒い影」は狐の世界から見たものなのである。「黒い影」には理解し得ないものに対する狐たちの不気味さ、恐怖の感情が表れている。四郎とかん子と子狐たちの感動的な交流の後のこのシーンはこの問題の根深さ、まだまだこの世界には課題が山積していることの暗示なのではないだろうか。

#### 四、「雪渡り」授業構想

「イーハトヴ」という世界の大枠を設定し、その国は日本ではなくあくまでも「イーハトヴ」という賢治のテキスト上の世界であるという認識を生徒にさせること。ここからこの「雪渡り」の授業は始まる。この認識をさせることは作者からも日本という国からも、彼らの既成概念からも一定の距離を置くことになり、テキスト論的な教材へのスタンスを自然ととることになる。

次に、「雪渡り」で描かれる「イーハトヴ」の特異性に生徒の目を向けさせたい。「この「イーハトヴ」という世界は現実の世界(今時分たちが生活している世界)と比べて変わっていることはないか」というような学習課題を設定してもよい。このテキストが単なる狐と人間の交流譚ではなく、複雑な事情を内包している話であることに生徒たちが気づき、その気づきが実感となり彼らの学習意欲を高めるだろう。その確かな実感を持たせることを大切に。彼らが発見したれば、授業での言語活動も活発なものになり得る。彼らが発見した「イーハトヴ」という世界、「雪渡り」の世界が誕生し、変えたくても変えられない巨大なものの前で立ち尽くす主人公の姿に興味を覚えるのではないか。このような形でこのテキストを教材として活用するのならば、小学校ではなくて中学校の教材のほうが適当であろう。

#### 五、おわりに

最近考えることは、様々な「雪渡り」というテキストの分析(読み込み)、教材「雪渡り」の(読み)としてどのように活用していけばよいかということである。テキスト分析はもちろんそれ自体だけでも大いにその価値はある。しかし、教育の現場でもそのテキスト分析、テキスト理論が活用されることは実際決して多くはない。

教材としての(読み)を考えるのならば(読むこと)以外の観点、授業方法論、国語科に求められていること、今の教育に求められていること、目の前の生徒につけさせたい力等をじっくり考え、それらも授業の主要な要素としていかなくはならない。そして、そのテキスト分析が果たして授業の目的を達成するために有効な手段となりうるかどうかをじっくりと吟味する必要がある。紙面の関係上本論では十分な分析はできないが、国語科教育の中で賢治教材にポストコロニアル理論を取り入れ授業をすることは生徒に明確な学習の目標を与え、言語活動を活発にさせ、学ぶ実感を彼らに与えることができるのではないかと稿者は考えている。また、ポストコロニアル理論の一つの活用例を国語科教育の中で出せるのではないかと考えている。

最後に。賢治テキストはまだ他の理論で新たな一面を見せる可能性がある。それを国語科の授業に生かす方策も考えていかななくてはならない。賢治テキスト、賢治教材にはまだまだ未知なる可能性があるのではないだろうか。

(たかはしゆきのり／東京都立立川国際中等教育学校)